

## 【特色あるフロンティアスクールの取組事例】

都道府県番号	46
都道府県名	鹿児島県

(      )

### 学校名及び規模

伊仙町立伊仙小学校									
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	1	2	1	1	0	7	
児童数	28	23	26	42	27	36	0	182	12

### 実践研究の概要

<p>・主題（テーマ） 子ども自ら、「学び」を育てる子どもの育成</p> <p>・テーマ設定の趣旨 本校の子どもの実態を昨年度の標準学力検査から分析してみると、昨年度から実施された「チャレンジタイム」（計算力向上を目的として日課表内に位置づけした時間）の効果が「知識・理解」面において出てきていた。確かに、「知識・理解」面の向上は「基礎学力」の一部であり重要な要素である。しかし、単元テストなどの結果のみを通して見える学力だけをもって学力が伸びたというのは早急であろう。実際、本校の子どもの日頃の学習状況を見ると、自分の考えをうまく表現できなかったり、既習事項の定着度合いをプレテストで調査するとその到達度結果は、標準学力検査とはかなりの開きがあったりした。</p> <p>そこで、基礎学力の基礎となる要素を分析し、子ども自らが自分の学習状況を把握しながら学習を学校でも家庭でも展開できるようにしたいと考え、本テーマに設定することにした。</p>
---

### 実践研究内容について

#### ( ) 研究体制の工夫

##### 研究テーマ設定について

研究テーマ設定に当たっては、教職員間の共通理解を図るために、これまでの研究体制上の課題や基礎学力を高めるの資質、能力を集約することにした。集約した結果については、内容面と運営面に分類し、討議を重ねた。

まず、内容面については、昨年度まで研究してきた成果を基に現在の子どもの実態、これから育てていきたい子ども像、子どもに身に付けさせたい力、基礎学力の向上を阻んでいる要因などについて共通理解を図るようにした。

次に、運営面については、研修計画立案の上で解消できようように手だてを講じることにした。

さらに、学力向上推進協議会を設置し、テーマ設定の理由や研究の方向性について共通理解を図ったり、授業研究に参加することを通して、今後の研究の方向を検討したりするようにした。また、学力推進協議会の役割に関しては、全教職員に対し、必要性をこの事業の趣旨と関連づけて説明した。

##### 実践方法の共通理解について

全校一致体制でこの事業に臨むために、教職員の役割分担を明確にした。研究組織については、細分化すると同時に各組織の連携を図っていった。

実践方法の方向性や内容については、実践に入る前に共通理解の場を設定した。

#### ( ) 実践研究の内容

##### 子どもの学力の評価を生かした指導法の改善

本校では、昨年度までに、計算力の向上をねらいとした「チャレンジタイム」を授業の中に導入してきた。その結果、計算力の向上は確かに見られたが、「数量関係」の領域や「数学的な見方・考え方」においての落ち込みがあった。

そこで、1学期より算数科の全単元の「個人カルテ」を作成し、個や学級、学年の分析を行うことにした。

分析結果を基に、習熟度別コースにおける少人数指導を導入するとともに、昨年度までであった「チャレンジタイム」について、次のような観点を基に改善を図った。

＜改善の観点＞

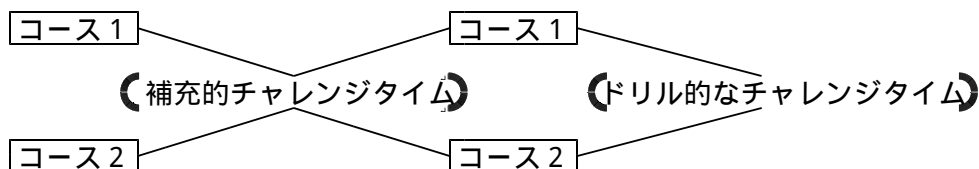
子どもの発展的な力を伸ばすためにはどのようにしたらいいだろうか。  
 自分の苦手な領域，単元の内容を補充するためにはどのようにしたらいいだろうか。  
 確かな計算力を身に付けさせるためにはどのようにしたらいいだろうか。  
 自分の解決策を振り返りながら，新たな解決策を見出したり，これまでの解決策を修正・補強・強化したりするための力を見出したりするにはどのようにしたらいいだろうか。

結果として「チャレンジタイム」を次のように4つの活動内容に分類し，子どもの実態（学力の定着状況），内容構成に応じて位置付けた。

名 称	活 動 の 内 容
「発展的チャレンジタイム」	教科書の内容の定着状況が十分な場合に，より発展的な問題に挑戦させる時間
「補充的チャレンジタイム」	自己診断テストにより苦手な領域や単元についての復習やこれまでの「個人カルテ」の分析結果に基づいて補充的な授業を行う時間
「ドリル的なチャレンジタイム」	単元の内容を支える計算や既習の計算学習 ・ 時間を決めて速さや正確さを培うためのドリルを中心に行う時間
「相談的なチャレンジタイム」	子どものつまづきを探る時間 子どもの学び方の定着を図る時間

位置付け方は，単元の内容構成を考慮しながら，週1回位置付ける。

＜例1＞「数と計算」領域では，習熟度別コースにおける少人数指導の形態をとっているため，「補充的チャレンジタイム」を自己診断テストとの時間を組み合わせて単元途中で実施し，習熟度別コースの変更の手立てに活用した。さらに，計算技能を高めるために「ドリル的なチャレンジタイム」を単元の最後に実施した。



補充的チャレンジタイムで活用した教材例（内容の補充を目的）

1 ( ) の中に当てはまる言葉を書きなさい。

割合 = ( ) ÷ ( )

( ) ÷ ( ) = 倍

平均  2.0 m

ただし  4.0 m

割合 0 ( ) ( ) (倍)

平均  4.0 m

ただし  2.0 m

割合 0 ( ) ( ) (倍)

2 次の計算をしなさい。

$\frac{2}{5} \cdot \frac{3}{4}$                        $\frac{16}{9} \cdot \frac{4}{15}$

ドリル的なチャレンジタイムで活用した教材例（計算技能の向上を目的）  
 次の計算をしましょう。目標タイム（ ）分 実際かかった時間（ ）分

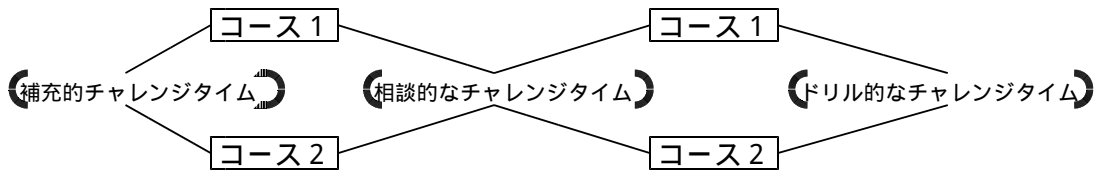
$28 \div 24 =$	$15 \div 18 =$
$16 \div 20 \times 100 =$	$144 \div 120 \times 100 =$
$\frac{4}{9} \div \frac{16}{27}$	$\frac{3}{2} \div \frac{5}{4}$

目標時間内で終わったお友達はどこがよかったのか書いてみましょう。  
 目標時間で終わらなかったお友達はその理由を考えて書いてみましょう。

<例2> 「数量関係」領域では、高学年にもなるとかなりの個人差が出てくる。個人差の内容は「計算力、数学的な見方・考え方」がある。そこで、子ども自身に意欲的に取り組ませ、学ぶ喜びや楽しさを味わわせて学習を展開していくためにも、「相談的なチャレンジタイム」を導入し、子どもの学力の確かな把握と子どもへの学習の進め方、家庭学習への指示がより細かくできるようにした。

特に、相談的なチャレンジタイムについては、数量関係の領域において、単元内に位置付けるようにする。位置付ける際には、子どもの内容の習熟度の程度だけではなく、内容理解に必要な計算力の実態について把握ができるようにする。

例えば、小数のわり算の定着が十分でないことが判明した場合は、その子どもに小数のわり算の復習も含めて家庭学習での支援ができるようにするのである。



( ) 成果と課題

全校児童の個人カルテの分析による「チャレンジタイム」の見直しの結果、子どものつまずきを把握しやすくなり、個への対応の仕方がより具体的になってきた。

相談的なチャレンジタイムの導入により、子ども自身が、自分の学習状況や自分のつまずきを把握しやすくなった。

「個人カルテ」の対応策についての見直しを実践を通じた成果を基に実施していく必要がある。

今年度は、相談的なチャレンジタイムの導入を「数量関係」領域中心に実施したが、他の領域での実施の可能性を探る必要性がある。

( ) 成果の普及方策

- ・ 今年度は、2回の授業研究会を実施し、学力推進協議会のメンバーや中学校の教職員、幼稚園教諭などにも参観してもらった。
- ・ 地区の学力向上推進協議会の場で、本校の研究内容や方向性、意義・価値を説明し地域と一体となった取組になるように努めた。
- ・ 保護者への啓発を図るために、家庭教育学級やPTA総会で趣旨説明を行った。